

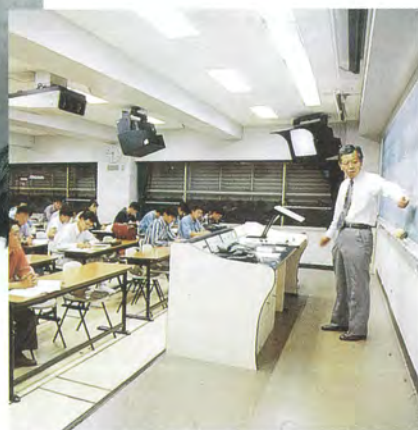
東京電機大学短期大学

M40.9 S25	30	35	40	45	50	55	60	H元	5	10					
電機学校創立	31.2														
東京電機大学短期大学部(夜)	東京電機大学短期大学(夜)														
短大学長	宇野幸一	蓮見孝雄	佐々木哲夫	中村欽雄	廣瀬淳雄	深海登世司	田所睦雄	金田輝男	S41.4	51.4	54.4	58.4	62.4	H5.4	10.4

短大の概況 昭和25年4月(1950), 昼間勤労し夜間において職業に関する専門教育を受けようとする者に対し, 電気工学に関する専門の学術技芸を教授することを目的として, 創立時は短期大学部としてスタートした。昭和31年4月に学則変更を行い, 東京電機大学短期大学と改称した。その後, 短期大学に対する社会的要望に応じて, 電気工学コースと電子・情報コースの2つのコースを同時開講する制度に改革し, 最近では大学学部を卒業して電気技術を必要とする人や, 卒業後さらに4年制大学に編入を目指すなど多様な目的を持った学生のための好適な勉学場としての機能を果たし, 今日に至っている。ここでは本学短期大学の最近の勉学環境を中心とする写真を載せることとした。



授業は, おもに7号館校舎を中心に午後5時30分より行なわれている



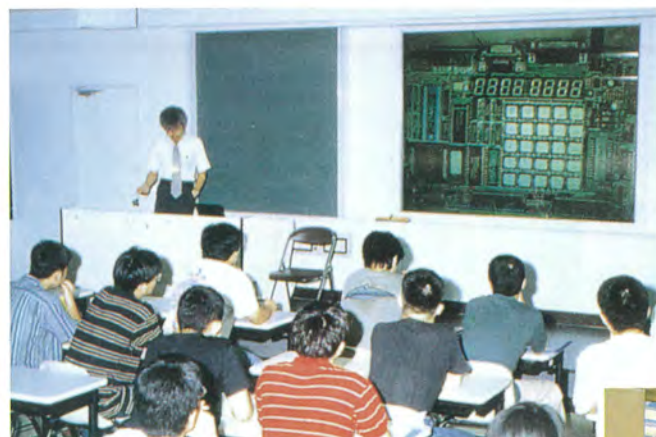
専門科目の授業風景



電気系基礎実験

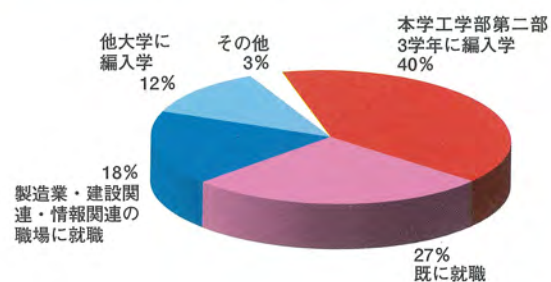


コンピュータ実習室(学部と共用)



短大専用AV教室

平成9年卒業者の進路状況

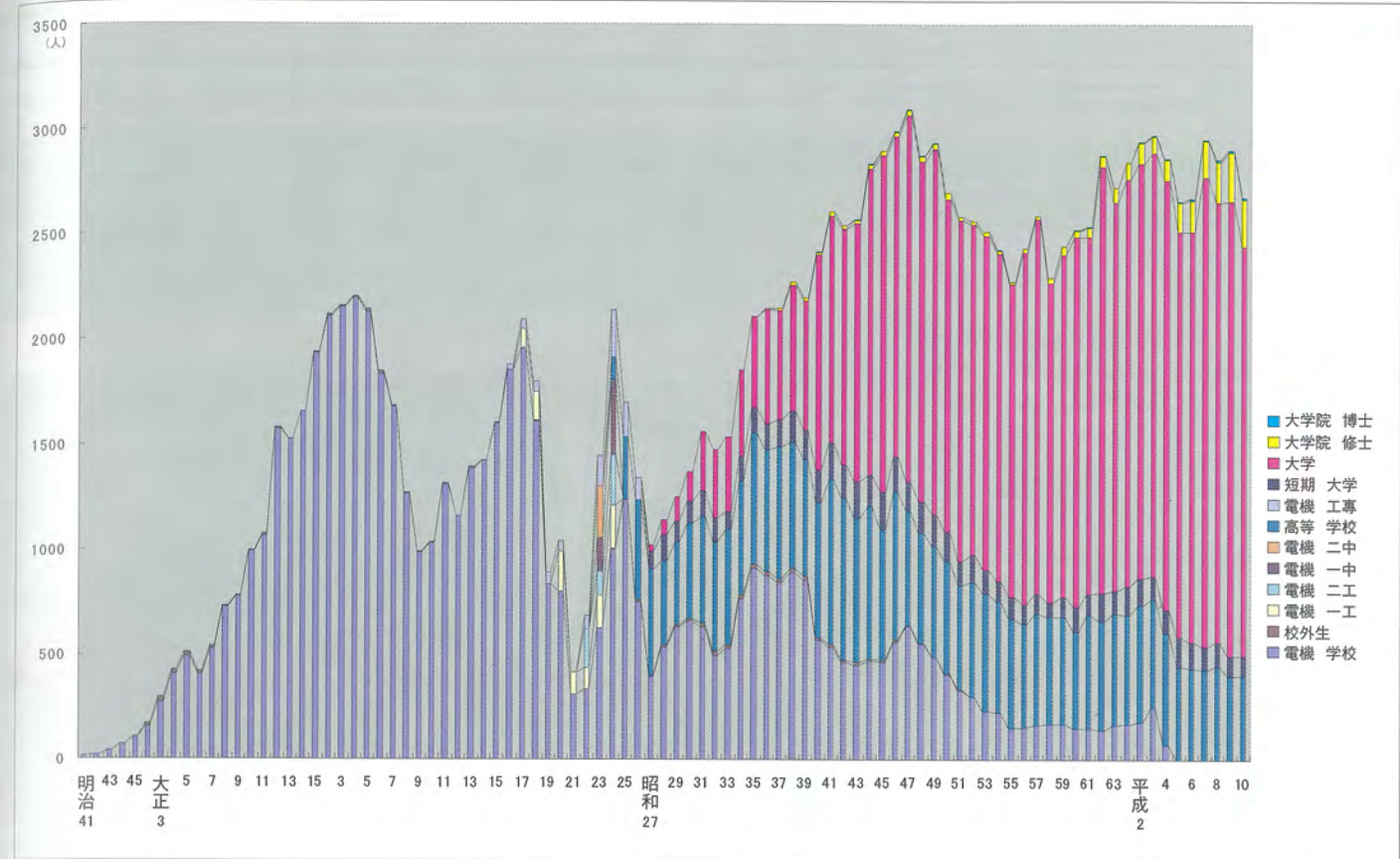


学生喫茶室 Tea Timeで談笑する短大生たち



学生専用スタジオ「Din Pal I」

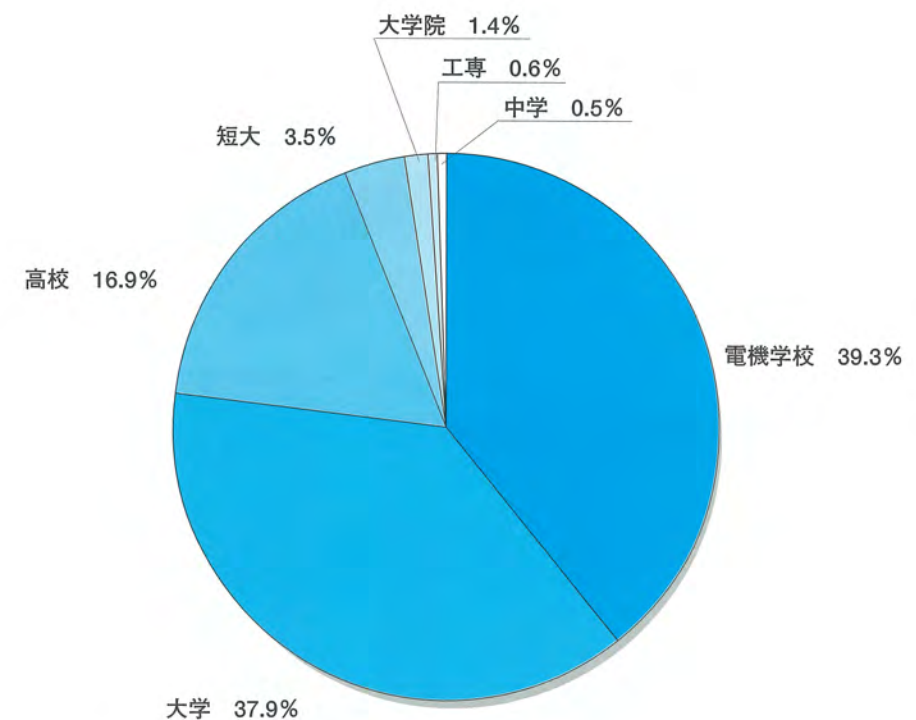
グラフで見る校勢90年—法人設置の学校別卒業生数—



法人設置の学校別卒業生総数及び構成比

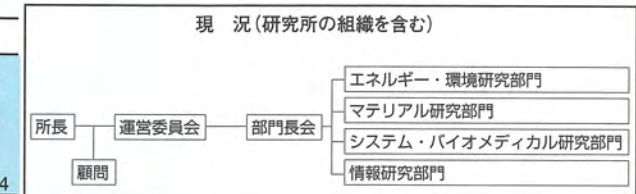
種別	電機学校	中学	高校	短大	工専	大学	大学院	計
人数	64,587	763	27,698	5,813	915	62,277	2,235	164,288
%	39.31	0.46	16.86	3.54	0.56	37.91	1.36	100.00

平成10年3月31日現在



大学付置機関 総合研究所等のあゆみ

西暦 '49 '50	55	60	65	70	75	80	85	90	95	97	
明治40 昭24	30	35	40	45	50	55	60	平成元 3 4 5	9		
S26.7	電力応用研究所					49.3 50.4	56.4	H3.10			
所長	竹内寿太郎					S46.12	磯部直吉	総合研究所			
						50.4 52.4	58.4	H元.4	6.4	9.4	
						所長 阪本捷房	平松啓二	宮入庄太	穂坂 衛	山本善之	藤巻忠雄



電力応用研究所 電力応用研究所は、大学の附属機関として、故竹内寿太郎教授の提唱によって昭和26年7月1日(1951)に設立された。当時、戦後の混乱期もおさまり世情は次第に平穏になりつつあったが、研究環境は極めて悪く、研究者はその研究方向について暗中模索の状態であった。そのような中であって竹内初代所長はいち早く当時の言葉でいう「強電と弱電の組み合わせ」の重要性を強調され、自らも今日のパワーエレクトロニクスの先駆者として、その理論の展開ならびに応用について精力的に研究をされた。開所当初所長以下4人の小人数で発足した研究所も年を追うごとに発展し、その研究成果も著しく、設立から昭和43年までの研究論文及び著書はおおよそ200件、特許は45件にものぼった。



発足当時の電力応用研究所と初代所長竹内寿太郎教授

情報工学研究所 この研究所は既存の専門分野にとらわれず、互いに異なる分野の研究者が広く交流し、協同して情報交換しながら研究を推進する目的で、昭和46年9月(1971)に設立された。初代所長には阪本捷房教授が就任され、他領域の研究者間の結合と協同が行われ、「プロジェクト研究」の形で研究を進展させ、実りある数々の研究実績を挙げる事ができた。



自宅で論文執筆中の竹内寿太郎博士



試作特殊電動機のテスト

総合研究所 総合研究所は、昭和56年4月(1981)に全学的研究機関としての性格を一層強め、工学・理学に関する一般研究及びプロジェクト研究、学外との共同研究、研究及び開発技術者の養成を目的として、電力応用研究所、情報工学研究所を発展的に解消し、エネルギー、マテリアル、システムの3部門で構成する研究所(初代所長 宮入庄太教授)として設立された。平成4年4月(1992)にはエネルギー・環境、マテリアル、システム・バイオメディカル、情報の4つの研究部門に改編し、今日に至っている。

平成3年4月(1991)に「超伝導センサ研究施設」、更に平成4年4月(1992)には「建設技術研究施設」が、それぞれ総合研究所の付置研究施設として千葉ニュータウンキャンパス内に設置された。その後、研究組織の改編が行われ、平成9年4月より、総合研究所から2つの研究施設が分離され、それぞれ「超伝導応用研究所」、「建設技術研究所」として独立した。



電大式アナログ・コンピュータ



毎年1回開催が恒例の「抜多の会」に参加した研究所の面々



総合研究所開所後の祝賀会



情報工学研究所 研究報告



総合研究所報告



研究発表風景 平成2年頃
コンピュータ化した音声付英語辞書の開発と製品化



研究発表風景 平10.6.13.
国際理解教育に関する日米比較研究



研究発表風景 平10.6.13
気流中アーク電流減少過程のアークパラメータの測定



超伝導センサ研究施設 (→H9.4超伝導応用研究所となる) 平3.10



建設技術研究施設 (→H9.4建設技術研究所となる) 平4.6



開設時に設置されたクリーンルーム (超伝導センサー研)



直角2方向耐力壁 (建設技研)

超電導応用研究所・建設技術研究所・産官学交流センターの現況

超電導応用研究所

超電導応用研究所ハイテク・リサーチセンター

本学研究機関の概要 東京電機大学では現在、3つの研究所と産官学交流センターを擁して、本学の学術研究のより一層の向上と社会での先端技術分野の進展に役立つ研究の推進を図っている。これら研究所の内、総合研究所については、既に記述済みにつき、ここでは省略する。

超電導応用研究所 超電導応用研究所は、平成9年4月より発足し、広く人間の心身の計測を対象とした研究を行なっている。研究の中心は、人間の脳から発生する極微弱磁場を計測するSQUIDシステムであり、世界的にも最高水準のものが実現されている。これを応用し、様々な刺激を受けて活動している脳の状態を精密に解析するための研究をすすめている。さらに平成9年度から文部省ハイテクリサーチセンターにも選定され、新たにハイテクリサーチ棟を建設した。ここでは最新のMRI（磁気共鳴画像装置）を備え、磁場により人体内部を無侵襲で計測することができる。さらに脳波計や運動解析装置など人間の心身状態を様々な角度から計測できる設備を備え、「人間社会と技術の調和」というテーマのもと、これらの設備を活用して、特に高齢者や乳幼児の運動や心理状態の計測について研究している。



超電導棟（7号館） 平3.10



ハイテク・リサーチ棟（11号館） 平10.3

建設技術研究所 建設技術研究所は平成9年4月から産学共同施設として設置され、直交する2枚の巨大な耐力壁と耐力床を備えた構造骨組の地震時の立体的挙動の解明を目的とした実大構造・施工実験室、主に平面的な構造部材の力学的挙動の解明を目的とした構造部材実験室、建設材料の開発などを行う材料実験室、並びに氷蓄熱空調システム開発などを行う環境工学実験室により構成され、建設技術に関する基礎的な研究から実用化を目指した開発研究などが進められている。また、建築学科の実験室として、高学年の学生実験および卒業研究、修士・博士論文の研究にも利用されている。

大規模SQUIDシステム



超高性能磁気シールドルーム（愛称「COSMOS」）
32面体形状をなし、4層のパーマロイ合金と1層のアルミニウム板からなる多重隔壁で構成されている

産官学交流センター 本学では、平成9年4月に、社会と学術的な交流を持つための窓口として「産官学交流センター」を新設した。産業界、国や地方自治体、さらに国内外の大学、研究機関などや、卒業生との学術交流を計ることで、より一層、社会に貢献する研究を推進していく所存である。

また、海外の大学との学術交流を図る一環として、米国ポリテクニク大学との学術交流協定に基づいて、本学大学院との提携により、同大学大学院の修士課程修了所要単位数のそれぞれ3分の1を本学大学院、インターネットの利用、ポリテクニク大学院通学の方法により、ポリテクニク大学大学院の修士の学位を取得できるという画期的なGlobal Collaborative Education Programを平成10年度より実施することになり、学生募集を開始することになった。

注：SQUIDsとは、Superconducting QUantum Interference Devicesの略号で、「超伝導量子干渉素子」の意。



COSMOSの室内中央にはSQUIDシステムが設置されている。写真はSQUIDによる脳磁界計測の様子を示す



3次元運動解析装置
人間の動きをカメラで撮影し、3次元空間での運動として計測、解析する



脳波計
様々な状況下での脳の活動状況を電氣的に計測

MRI（磁気共鳴画像装置）



MRI（磁気共鳴画像装置）
高性能超電導磁石を用い、人体の断面像を無侵襲（傷つけず）に撮影する装置



MRI操作コンソール



高速度液体クロマトグラフィー装置
各種の生体試料の成分分析

建設技術研究所



実験室（研究概要）



実大構造・施工実験室
直角2方向耐力壁を用いたプレキャストコンクリート階段の水平加力実験

構造部材実験室
鉄筋コンクリート有孔ばりのせん断破壊実験

1000kN万能試験機→
コンクリート、鋼材などの建設材料の力学的物性及び新素材の開発をおこなう



構造部材実験室
加力フレームを用いた鉄筋コンクリート壁の水平加力実験



2000kN圧縮試験機
各種構造部材の圧縮（座屈）及び曲げ実験などをおこなう

総合メディアセンターのあゆみ

M 40.9	S 24.4	25	30	35	40	45	50	55	60	H元	5	9	
電機学校創立		東京電機大学開設											
24.4		大学図書館											
館長 藤田 豊		45.4			51.4			55.4			57.11 高尾利治		
S38.4		42.4		47.4		53.4		57.4		-57.12			
室長 舟橋憲治		センター長 池田益夫		増田眞郎		中村一郎		63.4		H4.4		7.4	
電子計算機センター		総合メディアセンター											
室長 荒谷孝夫		63.4			H4.4			7.4			センター長 福井康裕		
		近谷英昭			須藤福三			星野洋					

大学図書館の発足とその変遷 新制大学設置の必須条件の1つとして、図書館設備の充実があった。学園は、基準を満たすため3号館230号室を図書室にあり、昭和23年9月から教員及び工学専攻を対象に仮閲覧業務を開始した。昭和24年4月1日(1949)大学創設と同時に大学図書館として正式に発足した。翌25年短期大学部が設置され、工学部・短大共用の図書館となった。その後昭和32年には3号館第1、第2閲覧室を増設。昭和37年、5号館に分館を、また7号館の竣工により図書館施設の集中化を図った。昭和59年6月から11号館に移転し、1階及び2階の一部を使用して装いも新たに現在の工学部・短期大学図書館が誕生した。一方、創立70周年記念事業の一つとして昭和52年に理工学部が開設され、鳩山分館(現在の理工学部図書館)が発足した。更に平成2年4月から千葉ニュータウンキャンパスに千葉分室が設置され、大学図書館の構成は3キャンパス、2館・1分室制で活動することになった。

図書システム



中央大学より取得した図書館(左) 昭和30年の増改築で、外観はかなり変貌した



昭和28年当時の閲覧風景(第2閲覧室)

電子計算機センター 昭和38年にNEAC-2230を購入、同年12月より運用を開始した。昭和42年4月1日(1967)に電子計算機センターが発足した。昭和49年12月より新機種FACOM230-48を導入し、昭和52年4月より工学部センター、理工学部センターが発足した。昭和59年にACOS S850システムを、また平成元年にはFACOM VP-100Eシステムをそれぞれ導入し、平成7年に実施した学園全体のリプレースでは、教育システムとして神田キャンパスに260台、千葉ニュータウンキャンパスに320台、鳩山キャンパスに320台の合計850台のパソコンを導入し、教育研究に顕著な効果を発揮している。その間数回に亘る新機種導入、増強、更新を経て、平成7年にはスーパーコンピュータCRAYJ916等を導入し、今日に至っている。

現在の状況



図書検索コーナー(工学部・図書閲覧室内) 平10



閲覧風景(工学部千葉分室) 平10

総合メディアセンター 平成8年10月1日(1996)より、電算機情報、図書、工学機器および研究用メディアを扱っている部署を一体の組織とし、メディア資源の有機的・効果的利用を促進するため、現行の電子計算機センター、図書館、教育工学センター、事務システム開発室並びに小金井キャンパス電子計算機センターの組織を統廃合することとし、『総合メディアセンター』の新名称の下に発足した。



閲覧風景(神田キャンパス・工学部) 平10



理工学部図書館棟(キャレル:閲覧個室)から実験棟を望む 昭52.4.27.



オープン書架・閲覧室(理工学部) 平5

コンピュータシステム



NEAC 2230(日本電気)システム導入 昭38



FACOM 230-48(富士通)システム導入 昭50



教育工学センター 集中制御室 昭47



最新の機器を備えたメディアルーム 平7



コンピュータ実習風景(工学部) 平10



ACOS S850(日本電気)システム導入 昭59



FACOM VP-100E(富士通)システム導入 平元

現在のコンピュータ環境



神田キャンパス 機械室



鳩山キャンパス 第一機械室



小金井キャンパス 機械室



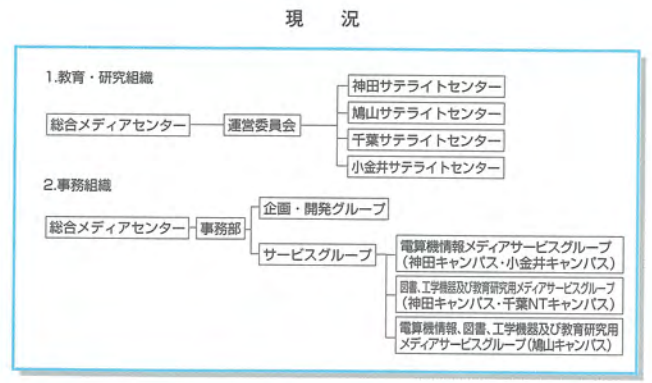
神田キャンパス 第二ワークステーション室



千葉ニュータウンキャンパス コンピュータ教室



小金井キャンパス コンピュータルーム

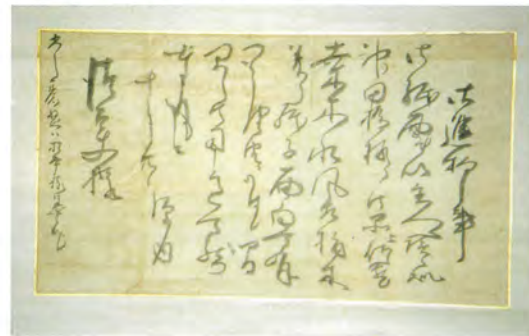


特別コレクション・展示品

東京電機大学では、より開かれた大学を目指してさまざまな活動を展開しております。その一環として、貴重な学術資料や実験装置のほかに、広く理工学に関する古文書・絵画等を永年にわたって収集、保存してきました。今後は、これらを一大学の所有にとどめず、広く内外の教育・学術研究ならびに啓蒙活動に役立てていただけるようお願いしております。コレクションの総数は数千点にのぼり、学外の研究者からも極めて高い評価を得ております。ここでは、そのほんの一部を紹介いたします。

●平賀源内の書状と名札（今の名刺）

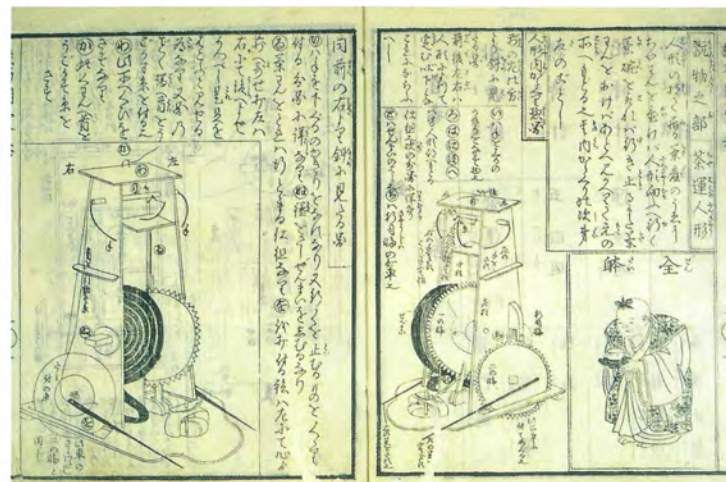
掛軸に収められたこの書状は平賀源内が清太夫に宛てたもので、時の老中田沼意次への進物を依頼した内容である。名刺は、源内が江戸在住の頃のもので、当時は自筆の手札が、今日の名刺にあたるものとして使われていた。（総合メディアセンター特別資料室所蔵）



●平賀源内「火流布略説」（カカンブリヤクセツ）1765年
源内は西洋から伝わった火流布（石綿）に興味を示し、その製造に成功した。本書には、火流布の由来や性質が図入りで説明されている。（同特別資料室所蔵）

●宇田川榕庵「舎密開宗」（セイミカイソウ）

わが国の近代化学を体系的に紹介した初めての書。「舎密」とはオランダ語の chemie の音訳で、明治時代に化学と呼ばれるようになった。図は蒸留実験。（総合メディアセンター特別資料室所蔵）



●細川半蔵「機巧圖彙」（カラクリズイ） 全3巻

「機巧」とは、ばね、ぜんまい、糸、歯車などによって人形や玩具を巧みに動かす仕掛けのこと。和時計や茶運人形などの機構と製法について解説。江戸時代の自動機械について詳述した唯一の文献。当時の職人技術の水準の高さを伝えている。（総合メディアセンター閲覧室に展示中）



●馮高温「電氣通標」（デンキツウヒョウ）写本
「電氣」という言葉の初出は本書、これより前は「越歴」（エレキ）という音訳語が使われた。この写本は日本では数点しか存在しない。



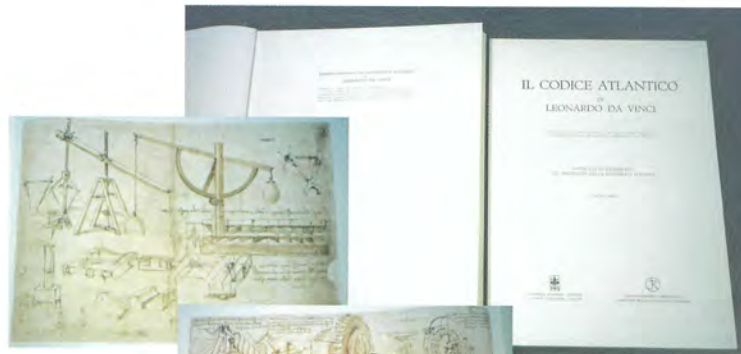
●福沢諭吉「訓蒙窮理図解」（クンモウキウリズカイ） 全3巻
「窮理」とは今日の物理にあたる言葉。明治の初めには初等教育が始まり、「窮理ブーム」が起き、本書も広く読まれた。（総合メディアセンター閲覧室に展示中）



●トーマス・A・エジソン「エジソンダイナモ」、エジソン形直流発電機
1879年に発明し、自らエジソン社を創立、この機械を製造した。現存しているのは東大、国立博物館、東京理科大と本学の4台であり、しかも発電可能なものは本学の1台のみで、歴史的にも貴重なもの。（理工学部プレゼンテーションセンターに展示中）



●エジソンの蓄音機
音を出し入れできる器械の出現の夢を、1877年に遂にエジソンが達成。日本には2年後の1879年に紹介された。写真はトライアンフModel C and D形式の蓄音機（理工学部プレゼンテーションセンターに展示中）

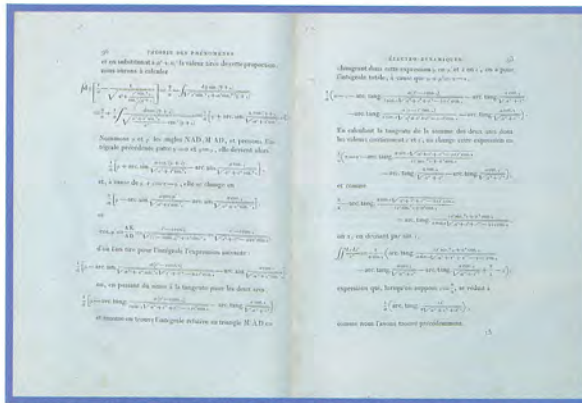


●レオナルド・ダ・ヴィンチ「アトランティコ手稿」

彼の代表的な手稿の一つで、ファクシミリ版（複製版）である。世界最高水準の複製技術を駆使した990部限定版の全12巻本。手製の総装装頓の豪華本で出版技術面からも貴重である。（総合メディアセンター特別書庫所蔵）



●ラウル・デュフィ「電氣の精」、リトグラフ（石版画）10枚組の中の9、10枚目
1937年パリ万博の時、電気館のために制作された大装飾画を10枚からなる石版画に仕上げ制作されたもの。古代から現代までの電氣の歴史を古代のターレスからエジソンまで、110人の人物が年代順に描かれている。（千葉ニュータウンキャンパスの福田記念国際交流センター1階ロビーに展示中）



●アンペール著「電氣力学現象の数学的理論」 1826年
本書は、彼の研究のなかでも特に有名な電流の磁気作用の研究が纏められたもの。電流の単位「アンペア」は彼の名にちなんでいる。（総合メディアセンター閲覧室に展示中）



●雑誌「Edison Day Number」
EDISON MAZDA LAMPSに關し、色鮮やかに紹介されている（総合メディアセンター閲覧室に展示中）

出版局の活動

出版局の創立

学園設立当時、電気工学といえば最新の学問であり、日本語で書かれた教科書はわずか2冊しかなかったという。教育効果を上げるためにも、また学界の発展のためにも、わかりやすい独自の教科書を作る必要があり、さらに収益事業としての使命も担って、出版局（当時は出版部）が設立された。謄写版もない時代で、最初の仕事は、当日の講義内容をあらかじめ薄紙で印刷した教科書の作成であった。

発行体制の整備と拡充

明治43年頃になって出版局の発行体制も整った。まず、通学できない篤学の青年のために校外教授制度（通信教育）が開始されたのを受け、その教科書として、『標準テレゴク』を刊行した。

大正3年、「卒業後も新知識の吸収はゆるがせにできない」という考えにより電気雑誌「OHM」を創刊した。その後、雑誌の発展のため株式会社オーム社を独立させ、引き継ぐこととなった。

戦後の再出発と高度成長

昭和21年に戦後初めての新刊書『電検標準解答』を発行した。また26年発行の『初等電気』は、戦後日本の工業立国への歩みとともに広く世の好評を博した。

昭和30年代に、大学拡充の社会要請にともない、学園経営の重点も大学に切り替えられた。同時に、出版局もユニバーシティプレスの立場から出版活動を行い、出版を通して科学技術教育の向上をはかることとなった。

その後の高度成長期に刊行された書籍として、『大学講座』及び『工学全書』、文部省編の学術文献や、英字文献、『標準電気機器講座』（全10巻）、『信頼性工学講座』（全5巻）などがあり、電気学会著作賞や日経デミング賞などを受賞した。

一方、職業高校生を対象とした文部省検定済教科書及び文部省著作教科書も昭和38年頃より発行を続け、現在10点刊行している。

マルチメディア社会に貢献する学術出版社

今日まで学園の発展に併走する形で理工系学術書、教科書、啓蒙書を中心に充実させ、既刊1000余点の発行点数を数えている。さらに高度情報化社会の進展を背景に、理工系大学院に対する社会的要請が高まっており、大学院向け教科書の拡充をはかっている。

最近の出版傾向としては、インターネットの急速な普及と、コンピュータの教育・家庭への導入に伴い、コンピュータの入門書から高度な情報科学系図書の刊行が顕著になってきている。とりわけ、マルチメディアにも積極的に取り組み、大学の研究成果を基にCAIシステムを開発し、話題となった。またCD-ROM付きの書籍も11点を数え、その発行比率も高まりつつある。

創立期の出版物



長距離教授標準講義録（全24巻）
明治43年に開設した校外教授制度（通信教育）の講義録として「長距離教授テレゴク」と名付けた教科書講座を発行。全24巻からなる電気工学界最初の講義録である。その後、何度も改訂発行を続け、戦前に至るまで電気工学の一大講座として評価されてきた

成長期の出版物



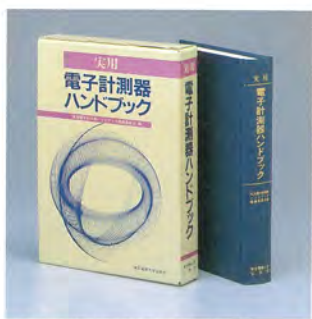
初等電気
昭和26年発行。学園最初の日本図書館協会選定図書で、約50万部を超えるベストセラーとなり、改訂を重ねて現在に至っている



標準電気機器講座（全10巻）
各巻ごとに電気機器製造の代表的8社から第一線技術者が執筆した。社団法人日本電機工業会の全面的な協力を得て創立60周年記念出版として発行



信頼性工学講座（全5巻）
品質管理分野で権威あるデミング賞の文献賞を受賞した



電子計測器ハンドブック
創立75周年記念出版として発行

最近の出版物



理工学講座（全37巻）
電気、電子、機械、物理等、理工学の各分野の重要項目を平易に解説。小局を代表する講座テキストとして多くの大学で採用されている



情報科学セミナー（全15巻）
数理科学セミナー（全3巻）
情報科学や数理科学の分野の新しい話題をいち早く提供。高度な内容をわかりやすく解説し、研究者や大学院生のテキストとして幅広く活用されている



CD-ROM付き書籍
Mathematica、MATLAB、ウェーブレット関連書籍を中心に、使用データをCD-ROMでも提供。読者の学習効率向上の手助けとなっている

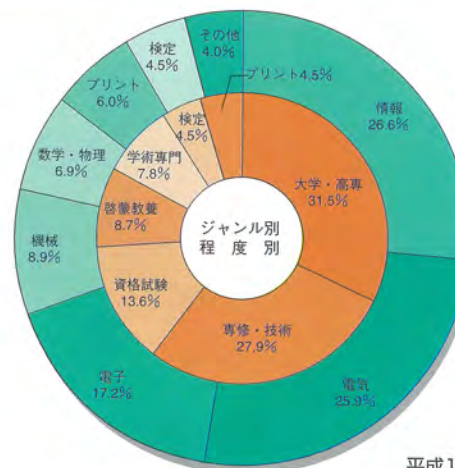


構造物の耐風工学
創立90周年記念出版として発行。土木、建築、電力、気象の精鋭の研究者による耐風工学の集大成



新・数学とコンピュータシリーズ（全10巻）
コンピュータやコンピュータに関連する数学を学習、教育するための入門書

発行書籍分類表



平成10年4月1日現在

出版局のショーウィンドウ



平成10年10月撮影

校友会・同窓会の現況

沿革

同窓会時代

明治42年10月21日
小島博、古川良吉の両氏が発起人となり
電機学校同窓会設立（会長 廣田精一）
会員数35名
大正11年10月22日
学園創立15周年：水力発電実験所寄贈
（関東大震災で焼失）

電機工業会時代

大正12年10月30日
社団法人認可（社）電機工業会誕生（初代理事長 原田健吉）
会員数6,890名
電機学校同窓会は発展的に解散

電機学友会時代

昭和3年5月16日
名称を電機学友会と改める
昭和7年
学園25周年記念：水力発電実験所再建
（戦災で焼失）

電機工業会時代

昭和21年9月26日
工業及び高工（後に高専）の卒業生を包含。（社）電機工業会と改める
昭和22年
工専同窓会発足（会長 大平力）
昭和22年11月
「電機工業会会誌」を改題して「新電年」を創刊
昭和23年10月
水力発電実験所を学園に寄贈
昭和27年3月29日
工専を含めた大学同窓会を設立（会長 大平力）

東京電機大学校友会

昭和35年1月25日
名称を社団法人東京電機大学校友会とすることが認可される
会員数58,408名
昭和35年4月17日
高等学校同窓会設立（会長 今田正）
昭和39年4月1日
電機学校同窓会再発足（会長 平岡三郎）
昭和59年5月
校友会創立75周年記念祝賀会開催

組織

校友会は（学）東京電機大学が設置する各学校を卒業した正会員（会費納入者）及び準会員（在學生）をもって組織された団体である。傘下には、大学・高校・電機学校同窓会があり、また横割りの組織として地方支部・県支部・職域電機会が設けられている。両者が結び合って確固たる校友会組織をつくりあげている。



校友会評議員会 平10.5



卒業生による就職セミナー 平9.3



高校同窓会創立35周年記念講演：中畑清氏 平8.7



電機学校同窓会総会 平10.

活動

会の運営は理事会を中心に行われ、地方支部・県支部・電機会等の活動を支援するとともに会員名簿の整備、会誌の編集発行、母校発展への協力を核とし、さらに社会的活動として講演会、講習会、見学会などの開催、また会員のための法律・特許の相談窓口、卒業生のための産官学共同相談窓口を開設している。さらに在學生には準会員事業基金を設立し、優秀団体表彰・学園祭等の全体行事援助・奨学金貸与など、積極的な支援活動を展開している。

地方支部・県支部・電機会の活性化

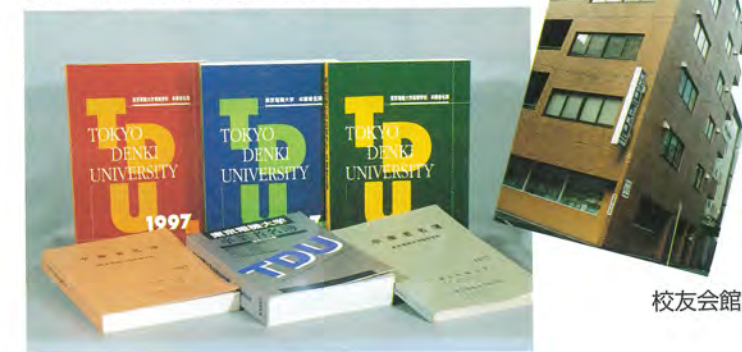
最近では特に地方支部・県支部・電機会の活性化に力を入れており、近い将来には各県ごとに県支部を設置し、卒業生が身近な所で気軽に本学園の卒業生として活動ができるような体制の構築を目指している。

また、職域ごとに55の職域電機会が設けられ、それぞれ会員の資質の向上および親睦、経営上の情報交換等を図る目的で活発に活動している。



卒業生名簿の発行

卒業生名簿は学園および校友会における重要な財産であり、この整備充実には最重要事業の一つとして当たっている。平成9年の学園創立90周年に合わせて10年ぶりに大学・高校・電機学校別の卒業生名簿を同時に発行した。



工学情報の発行

会報「工学情報」は会員相互の連絡を図るとともに学園、校友会の情報を知らせる唯一の機関誌である。そのルーツをたどると、大正元年に創刊された「同窓会誌」（後に月刊誌「OHM」創刊の基になった）に遡り、校友会では早くから卒業生への最新電気技術を積極的に紹介し、その普及に努めてきた。

大正元年12月
大正14年1月
昭和3年5月



昭和15年3月
昭和28年3月
昭和32年11月



昭和32年11月
昭和43年1月
平成10年7月



校友会の発展と卒業生数（累計）

